

私の酪農経営への夢 ～父の姿を見つめて～

福島県立福島明成高等学校 生物生産科 2年 高橋 歩夢

私の家は曾祖父が昭和23年にフィリピンより現在の地に入植してから続く酪農家です。当初は乳牛1頭から始め、やがて養蚕と両立した形態（複合経営）へ変わり、3代目の父が就農する時に専業酪農家となり現在に至ります。

幼い頃の私にとって牛舎は絶好の遊び場であり、搾乳をしている時は自転車のベルを鳴らしながら牛舎の中を走り回っては叱られたのですが、楽しく快適に感じられたのでやめられなかったことを覚えています。また牛の出産を間近で見ることもあり、出産したばかりの子牛を見ながら何故か気分が高まったり、またある時にはホルスタインショーに同行し、入賞しなかったときは小学校の担任の先生に自分が大人になったら1位になると豪語したことを覚えています。しかし、小学校高学年になると「牛舎に行くとき臭くなる」という気持ちが強くなり、牛舎に行くことも無くなりました。

ところが、平成20年の2月に父と共に作業をしていた祖父が、突然病気のために入院すると同時期に今度は祖母が重度の認知症となり、家族全員が協力してその状況を打開しなければならなくなりました。祖父の看護と祖母の介護はもちろんのこと、牛舎での作業は父が1人で行ない、農業経験の全くない母と共に、私が育成牛の飼料給与や子牛の哺乳などを手伝いました。初めて行う哺乳作業は、子牛の力の強さと哺乳バケツの重さに耐えきれず、途中であきらめ投げ出す状態でした。数日経って、父から「これはお前の牛だからミルクを飲ませて大きくしろ！来月のセリで売ったらお金はバイト代としてお前に全部やるから」と言われました。実は私の哺乳していた雄子牛は次の月に行なわれるセリに出荷されることが決まっていました。父の言葉は子牛の世話をするうちに可愛いと感じ始めていた私にとって衝撃的な一言でした。

真っ先に私が思い描いたのは、せっかく育てた子牛がトラックに乗せられて運ばれていく悲しく暗い光景です。現在振り返ると、その時始めて同じ動物でもペットとして飼われる動物と経済動物である牛との違いを知ったのです。それに加え哺乳作業を経験した事により作業の大変さを知り、搾った牛乳や子牛をセリに出荷したことが、酪農家を職業として意識した最初の瞬間だったのだと思います。それから数ヶ月後、病と懸命に闘っていた祖父が亡くなりました。

翌年の平成23年3月、甚大な被害をもたらした東日本大震災が発生しました。

小学校の卒業式を一週間後にひかえていた私は突然襲った大きな揺れから身を守ろうと親友と共に保健室の机の下に潜り、長く続く揺れが収まってくれることを願い机の脚に必死でしがみつきのながらただ恐怖に脅えていたことを現在も鮮明に覚えています。

外へ出ると、多くの家の屋根瓦やガラスが割れ、道路にはひびが入り陥没するなど非日常の世界が広がっていました。ただ幸いにも私の家族は怪我も無く牛舎や牛も無事だったので、私は繰り返される余震に怯えながらも胸を撫で下ろしました。

その頃父は、「停電にならなくて良かった」と言い、いつも通り夕方の搾乳に取りかかりました。私は搾乳という日常の光景を見たことで、とても強い安心感を抱くことができました。

しかし震災発生からわずか2日後、「集乳車の燃料が確保できない」との理由から牛乳の出荷はストップしてしまったのです。

連日テレビでは、津波による大惨事が伝えられ13日目になると、福島原子力発電所が水素爆発したことを報道し、それにより多くの人々が県外などに避難している事を知りました。また、その頃になると食料や飲み物がどこにも無いという、経験もしたことが無いような事態に陥りました。

その時私たち家族は、自分たちにできることを必死で考え、燃料が無く依然として集乳されない牛乳を近くの避難所に届ける事にしました。ところが、私の家にも牛乳を分けて欲しいと介護施設の方やその他多くの人たちがやってきました。牛乳が役に立っている事を喜び合っていたのも束の間、放射能が飛散されているという驚愕の事実が報道され、私たちはその事実に関わり苦しめられる事になりました。それからというもの、私の家には誰も訪れる事は無く、私や両親は牛乳を飲んだ人に健康被害が出るのではないかと抑えることのできない不安や罪悪感に苛まれ過ごしていました。

一方集乳制限が解除されるまでの40日間、出荷ではなく廃棄する牛乳の為に毎日牛に飼料給与し搾乳する父の辛さを思うと、かける言葉がみつかりませんでした。しかし、どんな苦境にあっても不屈の闘志を持ち酪農を続けている父の姿を見て、私も将来酪農家になり、私達の牧場を何事にも負けない強い牧場として発展させていきたいと心の中で強く決意します。

現在私は福島明成高等学校の生物生産科で大家畜を専攻し実習を通して様々な農業技術や知識を学んでいます。また、去年は「将来農業経営をしていく上でどのような経営形態にするべきか視野を広げたい」との思いから食の六次産業化プロデューサー「食Pro」の資格取得に挑戦しました。

また、今年6月に福島県学校農業クラブ連盟主催の技術競技大会「家畜審査競技乳牛の部」に初出場し優秀賞に入賞できました。この競技のための学習は奥が深く理解するのは容易ではありませんでした。競技直前はしっかりと審査ができるのか不安と緊張でいっぱいの中審査に臨みました。優秀賞として自分の名前を呼ばれたときは、これまでの不安や緊張が全て喜びに変わると同時に「ホルスタインショーで賞をとる」と言っていた幼い頃の記憶が蘇ってきました。さらに、審査する立場となってどのような乳牛が優良なのか、

反対に何が足りないと優秀では無いのかを見極め、どのように飼育すれば優良な乳牛になるのかを理解できた事は私にとって大きな自信となりました。今後更にこの学習を続けて理解を深め、来年の家畜審査競技では最優秀を目指します。

このような家畜を見極める技術も、経営力のある牧場に発展させる上でとても大切だと思います。しかし、個人の努力だけでは牧場を発展させるのに限界があります。そこで周りの人達との連携が大切になると考えます。

例えば、稲作農家が作る飼料米を利用する、果樹農家に堆肥を利用してもらうなど、農業全体が連携していく循環型農業のような共存共栄をしていくべきではないかと思います。

私は一人の酪農後継者として、また福島県の復興を担う世代として、めまぐるしく変動する世界情勢や想定外の災害にも負けないために、福島県立農業短期大学校へ進学し、より多くの知識や経験を積んでいきたいと思っています。これからも未来に向かって牛のように一步一步力強く確実に前進していきたいと思っています。
